



三笠中学校の性教育実践とその展開： 19年の実践分析から

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 末太郎 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/00009319 |

三笠中学校の性教育実践とその展開

—19年の実践分析から—

中村 末太郎

はじめに

三笠中学校の性教育実践の取り組みは2001年度で19年目をむかえる。こんなに長く続いていることにたいして人は「どうしてそんなに続いたの?」という驚きを持ってこたえる。私自身、この学校に20年在職して昨年春退職したが、性教育の実践の歩みと同じ期間を重ねてきた。

本稿では、長期にわたって実践を継続できた要因を焦点化しながら三笠中学校の性教育の実践を相対化することを本的とする。

第1章では、実践の歩みを配当時数やその内容を中心に上げ、歩みを貫く流れをとらえる。

第2章では、実践研究主題の変遷の背後にある実践上の対立点を通して確認されてきた性教育に対する見方や考えなどを概観する。

第3章では、性教育が培ってきた様々な学校経営上の影響について考察を行った。

さいごに、これまでの実践の到達点を今後の研究方向や課題などの総括を試みる。

これまで、在職中にも実践をふりかえる機会があったが、20年近い歴史をたどるといふ冒険に挑戦できたのも、様々な実践記録が残っていたからに他ならない。検討の対象とした記録を以下にあげておく。

- '88年度に「5年間の総括をする」
- '90年度に「学年・学級を中核とした生徒指導の充実をめざして～7年の歩み～」
- '95年度に「豊かなセクシュアリティを培う性教育の実践～12年間の歩み～」
- '99年3月「三笠中学校の性教育」と題して、本稿の骨格となるまとめを私が作成した。
- この他に「研究紀要」や「性教育学習指導案」が上記のものに加えてまとめられ印刷・製本され発行してきた。ここ10年の授業で

扱われた実践資料はたいして載っている。

本稿では、主題を焦点にして例えば「出産」をどう扱ってきたかのような取り上げ方はしていない。そこまでは、私の研究が進んでいないからである。これら残された問題は他日を期したいと思う。

第1章 実践の歩み

1. 実践の展開過程とその意義

本校の性教育の歩みを4つの大きな段階に分けることができる。基本的には、5年間を一区切りにした歩みのようにも読み取れる。これらの区切りとした原則は、指導時数の増加の歩みであり、それは同時に主題の増加と内容のとらえ直しの歩みともいうことができる。それらは、その段階の特徴を示す「用語」で説明できる。それは別項でふれる。

4つの段階は次の通りである。

- 第一段階 導入期 '83年度～'87年度
- 第二段階 改善期 '88年度～'92年度
- 第三段階 充実期 '93年度～'99年度
- 第四段階 発展期 '00年度～

私自身の思いと重ねて、これらの実践に努力してきた数多くの教職員の姿を思うと同時に、その時々々の主要なテーマに対してしっかりと研究し、それを全体のものにする姿勢を保ちながらそれを大切にして受け継いできた誠実さを思う。

性教育が学校現場になかなか根づかないことが長期にわたって続いている。その難しさが、実践の取り組みの中から明らかにすることができたと思う。それは、まさに「性」だからなのである。例えば社会科を教えることとは異なったアプローチを教師とそれを支える学校体制には必要である。この側面に対して意識して取り

組む必要があるからである。結論だけを言えば、性教育を実践する授業者は、いつも、授業で取り上げる性のテーマに対しての本人の意識や性に対する考え方の自己点検や自己省察を抜きにしては、授業実践への意欲や勇気が生まれてこないからである。いくら先輩が実践してきた指導案があったとしても、それをなぞることはできても、生徒とともに話し合いを深めることができない。教師一人一人が性的存在としての自分をどう受け入れそこからもう一度人間としての自己をとらえるかの意識の追求とそれを互いに交流できる教職員の存在とそれを支える教師集団としての校内体制が必要なのである。

そのようなことを授業者、学年の話し合いはくり返し、性教育の実践へとかさねてきた。導入期の議論は、もう過去の終わった事ではないのである。この20年間の中で、この間で何度も議論してきたことは、歴史的にみれば古い時代に属していようが関係なくつねに提起する者にとっては大切な問題なのである。

学校現場では転勤はごく当り前の社会である。従って、毎年、何人かの新しい教職員の交代がある。この新しい教職員との関係をどうするか、同じ様に一年すぎると新しい一年生が入学してくる。この事態に対してどう対応するかという問題意識や構えは、性教育では大切である。

その意味では、これまでの実践を時代ごとに区切ってとらえ直しをすることは、現在の性教育の課題を解明する上で十分に参考になると考えることができる。

2. 非行と性教育

本校の性教育の導入のきっかけは、いわゆる非行の第3ピークの中からはじまった。だから、それはあくまでも生徒指導の強化としての立場からのものであった。84年3月、卒業を間近かにせまった三年生を理科室に集め「ビデオによる男女交際について」の視聴と生徒指導係の補導委員長による講話が実施された。ここが性教育のスタートであった。翌年、補導委員会を改め、生徒指導委員会がつくられた。変えた理由は、非行の多発化と多様化に対応するには、一つ一つの非行事例に対処する方法ではなく、非

行を未然に防ぐこと、早期に発見すること、日常の学校生活を充実させること、生徒理解を深めてより広い多面的な視野から生徒をとらえ、適切な方針を出すことを目的としたものであった。当然に性教育の実施にあたっては、生徒指導委員会の任務の一つに加えられた。

この時代の学校現場では、おおよそ、つぎのようなことが議論の中心点、対立点であったと思う。

「暴力、性非行、対教師暴力などの問題に学校は、正常な学校をどうやってつくるか、安心した生活をどうやって保障するかということであった。

そこでは、生徒管理の徹底という道にすすむのか、学力、進路、性の『あたたかい学校』へと進むのかの二つの道があった。(君和田和一著生活指導指導資料より)」

幸いにして、本校では「あたたかい学校」の方向にある「性教育」を導入したのであった。

だからといって、きびしい生徒管理の方向が弱まったということではなく、何か出来ることは、1つでもあればみんなで取り組んで改善していこうという姿勢があったのである。性教育のとらえ方は性非行を防ぐという非行をなくするための一つの手段という立場であったと思う。

3. 性教育実践の歩み

(1) 導入期 (83年度から5年間)

この時期のまとめを書いた研究紀要(昭和63年11月25日発行による)に基づいて当時の様子を述べる。

「学年・学級を中核とした生徒指導の充実—性教育の指導実践」は、公開研究会を本校で実施した時に発表した。これを土台に「まえがき」で示した90年度の発表へとつながっていく。

① 性教育の推進について

養護教諭と学級活動係が協力して資料を提供した。素案である。それを生徒指導委員会にかけられて決まると次の全体研修での原案となり最終的にはそこで決められる。全体研修で決定すると、それを共通の方針、意志確認として、学年毎の話し合いへと進む。授業は、学級活動の時間において実施する。(当時は土曜日に学活を中心とする編成であった

ので、学年毎の計画で実施できた。）各学年1時間・1主題として始まり、それが2時間・2主題へと拡がっていく。5年目（87年）には、3時間をあてることへとつながる。

実践上の留意点を5点あげているが、その基本は実に見事に今日まで受け継がれている。

- ア. 学年での話し合いを土台にして授業案をつくる。
- イ. 授業は担任が行うこと。学級の個性を生かす。
- ウ. 資料は、生徒の実態にもとずいて独自に準備する。
- エ. 授業中に、必ず生徒に感想文を書かせる。
- オ. 授業後の反省を学年毎、学級毎に行い記録として残しておくこと。

上記の中で「イ」の原則が拡大され、学年の教師が分担して行うという基本に変わっている。公開研究会を次の「改善期」に行うことを通じて皆んなで授業をという方向へと自然に向いていった。

この導入期の全体研修や学年の話し合いの中心点は2つあった。一つは教師間の性や性教育の考えや理解の相違をどう調整し、共通理解、共通認識をつくり出すかということであった。

性教育に対する教師の対応は一人一人まさにバラバラで、全員それぞれ異なる状況の中で、若い教師ほど推進に積極的であった。幸いなことに、互いの考えを排除したり、一つの方向に強引にまとめるといふようなことにあまり時間をかけず、一応、その意見の相違は留保しておく、一致点を積み上げる努力という方向をむいてきたことである。

その一致点をつくるように2点目としての生徒の実態把握、生徒は性にどうむきあっているのか、どう考えているのか、どんな行動をしているのかの分析を必ず中心にすえて議論したり、アンケートを取ってきた。この生徒の実態解明の共通理解が深いほど、性教育の意欲も前向きになり、学年としての取り組みが生かさ

れたと考えられる。

② 教育活動への位置づけ

実施にあたっては、次の事項を原則とする。
ア. 学校教育の今日的実践課題として全教育活動の中にしっかりと位置づける。

イ. 性教育は、人間形成の問題として実践する。

ウ. 性教育にあたっては、学校教育の原則が適用される。つまり、男女共修、一斉に、同一学年同一カリキュラム、等。

エ. 授業は担任が行う。

オ. 性教育は、生徒の実態を基本にすえながら、学年、学級の特徴に応じて実践する。

カ. 性教育は、授業のときで終えるのではなく、個別に、小集団など、あらゆる場で、機会があれば実施できる。

③ 導入期が生み出したもの

ア. 学校の機能を生かす立場から、組織的に対応する道がつくられ、その活動が学校全体を動かしつつ、その機能が定着したことである。

イ. 学年部の話し合いが定着したこと

5年間の試行錯誤の中で、授業時数を1時間から3時間にふやしている事実がそれを証明している。

積極性を引き出したのは生徒の感想文であった。これが共通理解を広げ、生徒理解へと視野を広げ、授業への勇気をさらに引き出した。

ウ. 生徒理解の深まりが生徒指導を変える力に

生徒との信頼関係を育てていくことの大切さが、性教育の実践上の大前提となっていくことが明らかになると、管理的な校則違反追求ばかりの生徒指導の考え方に変化がでてきた。

2つだけあげておこう。

一つは、男女交際を非行とみる考え方をしなくなってきたこと、2つ目は、校内での担任責任論が弱まり、学年ごとの指導の体制を基本にしながら、全校的な視野から、全教職員で生徒を見ていくという視点へと変わっていった。

(2) 改善期 ('88年度から5年間)

この時期にさらに前半3年間と後半2年間に分けられる。

前半3年間は、主体的な公開研究会を性教育を中心に実践して広く市内の教育関係者に提供した。この中で、第1期の導入期の主題の改訂の作業に取り組んだ。大体において各学年3時間扱いの基本が出来あがったのである。

後半の2年間は、三笠市教育研究協議会（以下三教研という）の2年指定を受け、先きの各学年の3時間の主題の検証を行うという研究をした。

この改善期の特徴を一言で言えば、性教育の理論をつくりあげたことである。ヒューマンセクシュアリティの立場から、各学年3時間扱いの授業を、全体として（3年間の見通しと各学年の目標など）構築することができたのである。

① 性をとらえる

ここでは、項目だけを取り上げることにする。

ア. 性とは

イ. 性の基本的内容の視点

生物学的・心理学的・社会学的

ウ. 性教育の考え方

- ・性教育とは
- ・性教育の必要性
- ・性教育目標…全体目標と学年目標

エ. 学年ごとの主題

この部分は、最後の資料Ⅰ、Ⅱを参照されたい。

② この時期がもたらしたもの

ア. 研究意欲が実に旺盛な時期であった。
前半3年間は連続して自主的に性教育の公開授業を行って、その結果3か年で3学年分の系統的なカリキュラムを作成することができたことである。後半の2年間は、三教研の指定を受けたのを機会に、毎年1回計2回、3名の教師が道外研修・視察に参加し研究の視野を広げてきた。この蓄積が、次の「充実期」を準備するものと位置づけることができる。

このように、教育熱心な教職員の研究意欲とそれを生かす機会とに恵まれて、積極的に性教育の実践をさらに積みあげ

ることになった。

導入期とくらべてみたとき、性教育のとらえ方がより実践的で具体的であり、一応体系的な立場からの整理ができたといえる。

イ. 授業実践の向上

この力は、授業の質を大きく変えるものへと高まった。主題にもとずき、その主題にせまる授業展開というように、性教育の授業も普通の授業のように準備する力を持ってきた。さらに、主題や授業内容に応じた自主教材をつくることになり、生徒の実態にあったものへとむくことになった。

このような力をつくり出したのは、学年の話し合いの力量がいっそう高まったことでもあった。

授業への生徒のかかわりも変わり始めた。班の話し合いや生徒からのアンケートを活用したテーマについて班討議をするというように授業への参加の方法を考えるようになってきた。

生徒の感想文も、導入期におけるそれとも変わってきた。それは、学年が進むにつれて率直に書いてあり、しかも文章も長くなってきたことに気づいた。このような変化に私たちも気づいて、生徒理解というせまい見方から、さらに、授業の反省、改善として読むことができると考えるようになっていった。

ウ. 教育課程の位置づけへ

学校の組織としての位置づけから、さらに研究の深まりから、他の領域、特に保健体育とのかかわりや生徒指導とのつながりを考えるようになり、教育課程への位置づけという視点を持つようになった。

これらの課題は、次の時期へと引き継がれていく。

(3) 充実期 ('93年度から7年)

① エイズの導入をめぐる

80年代に入ってエイズのことが機会あるごとにマスコミを通じて知られるようになった。

そんな中、本校では90年のエイズデーで高まった世論を背景にこの問題を取り上げようという提案が出されてきた。この提案の背景に「性交」をどう位置づけるかという難問がふくまれていた。本校では、これまでの性教育の実践を土台に、当然の課題という意識で、何も問題視されることなく実践へと進んでいった。

「性交」の扱いと他の主題とのかかわりをどうするか、などさらに新しい課題もでてきた。それは「生殖の性」に「関係としての性」という性の見方が出てきたからである。そして、性をとらえる視点に気付かされた。それが、セックス、ジェンダー、セクシュアリティ、エロスなどの用語との出会いであった。

② エイズの実践の経過

'93年の2年の実践「エイズについて」が初めの取り組みである。この実践の反省から、各学年1時間このテーマを追加することになった。翌年1年「エイズ」2年生は前年の実践、3年生は実践していない。'95年度に全学年各1時間の「エイズ」の授業を実施した。

その後、対応が変わり、3年間で1時間の実践となり、01年度からはまた各学年1時間あてるようになっていく。

このように変化があるのは、社会状況の変化に伴う生徒のかかわりの問題がある。中学生の段階において「性交体験」の事例を知る機会が多くなったこと、性感染症の若者への広がりなどエイズの増加とともにもっと重視する必要を理解できたからだと思う。

③ 各学年のエイズの授業の要旨

ア. 1年「エイズ」

エイズのしくみを中心とする内容

- ・エイズとは、・エイズと免疫、・不全とは、・HIV ウィルス、・差別、など

イ. 2年「エイズその2」

社会とのかかわりを中心とする内容

- ・日本の現状、・「HIV 訴訟原告の陳述書」の学習、・血液感染と性交感染、・差別、・偏見の愚かさ

ウ. 3年生「STD・エイズ」

性感染症について

- ・どんな種類があるか
- ・班ごとに話し合う

④ この時期がもたらしたもの

ア. この時期は、これまでの実践の取り組みがしっかりと定着して、年間計画ができ上がったことから、学年部会の主体的な取り組みが、計画から反省そして記録を実践集としてまとめ、それを学活係(性教育担当)が年間の反省を加えて収録を印刷したことに一つの特徴をなす。だから、この時期の実践集は毎年度、残ってしらべることができる。

イ. 対外的な交流の機会が出てきたことが2つ目にあげられる。

私たちが特別に外にむかって実践を発表してきたわけではないが、長い性教育の取り組みをきいて学校を訪問するというのが出てきたのだと思う。

ウ. 学年の取り組みの中には、3時間の実践では足りなくて、時には4時間扱いになったり、あるテーマを2時間扱いにしてゆっくりと生徒とともに考える時間にするべきではという主張が出て来るようになったこと。これが次の発展への芽になったと思われる。

エ. この時期にもう一つふれたいことは、子どもたちの変化についてである。これまで特別に取り上げては来なかったのは、実践上の中心に子どもをおいて議論を深めてきたからで、この時期において、特に1年生の様子がこれまでと様子が異なって来ているのではという意見や見方が1年部所属の先生やその教室に入る先生からも出されてきていた。結論的には、幼いこと、話し合いがうまくできない、全体が学級としてのまとまりがなかなかなく、学級内がいつもザワついていて教師は指導しづらいなどということである。確かに、この時期には「いじめ」「不登校」さらに「学級崩壊」を体験した生徒が入学してきたなどがわかってきた。

もう一度、一年生の主題への検討が必

要だという認識が全体のものになってきた。

(4) 発展期 ('00年から現在)

この名称が妥当かどうかまだ不明で歴史全体をふりかえったとき、上記まで述べた区分と名称がこのままで良いかという気持ちがあるが、これまでの実践の流れから充実期と明らかに異なる配当時間の7時間扱いということから充実期と区切っていこうと考え、発展期と仮に名付けたものである。

この時期は、'00年度の反省から'01年度に7時間の扱いにすることにして主題をもっとゆっくりと深めることを基本に各学年ごとにそれに見合う主題を決めたものである。

その変化を一覧表に示す。

現在は、その検証という立場から三教研の研究指定を10年後に受けて研究中で、'02年度に本発表する予定である。

2000年度の主題の名称は当然に検討され変更されると思われる。

研究のテーマは「生徒の感想文から性教育の改善の視点をさぐる」という視点からの授業改善の研究である。これは、生徒の参加をどう広げるかというこれまでの私たちの授業への考え

方の一つの到達点を示していると思われる。

2001年10月に中間発表が行なわれ、その中で「感想文」の活用の方法についてと、生徒の授業への参加の方向性が明らかに出来たのではないかと考えている。私も共同研究者の立場でこの研究にかかわらせていただいて幸せである。

第2章 性教育実践上の課題をくぐり抜けて

1. 性非行と純潔教育からの脱皮

性教育を実施するか検討よりも大きい課題として非行問題をどうするかを毎日悪戦苦闘していた。その中で男女間のトラブルや女子生徒の問題行動はたいてい性的問題とつながっていた。非行をいかに押さえるか、早めにキャッチして予防するかという意識から対処していたのと同様な考えから性的問題を考えていた。性教育の必要はそんな中から出て来たのだが、私たちの前に純潔教育の立場からの発言が私たち推進派の若い教師の難問として出てきた。私たちは、いつの間にか、未婚の男女の純潔性は当然であるという意識が刷り込まれていたのである。生徒たちの問題行動も性非行も一括した問題としてとらえていたのである。

こんな中で、私たちの中にある純潔教育とい

※テーマの変化一覧

| | 1999年度 | 2000年度 |
|-------------|--|---|
| 1 学 年 | (1) 思春期の心とからだの変化 (2) 男子の体 (3) 女子の体 | (1)(2) からだとの対話①② (3) 性の疑問 (4) 思春期の心とからだ (5) 男のからだ (6) 女の体 (7) まとめと反省 |
| 2 学 年 | (1) 性情報と私たち (2) 性交と人間関係 (3) 性交と中学生 (4) すてきな男女交際 | (1) 性情報とわたしたち①～私たちを取り巻く性情報 (2) 性情報とわたしたち②～望ましい性情報の取り入れ方 (3) 性交と人間関係～性交の多様性とその本質 (4) 性交と中学生①～中学生に性交が与える影響 (5) 性交と中学生②～中学生としての男女の結びつき (6) すてきな男女交際①～中学生の男女交際 (7) すてきな男女交際②～望ましい男女交際のあり方 |
| 3 学 年 | (1) 生命誕生 (2) 性交と避妊① (3) 性交と避妊② (4) エイズと私たち (5) 自立と共生 | (1) 生命誕生 (2) 性交と避妊①～避妊の歴史 (3) 性交と避妊②～避妊の方法と種類 (4) 避妊と性交①～よく知ろう人工妊娠中絶 (5) STDって知ってる？ (6) 自立と共生①～自立について考える (7) 自立と共生②～ジェンダーチェックを作ろう |

(00年度性教育学習指導案集7ページより)

う意識と新しい性教育とはどこがちがうのかということをはっきりとさせなければならない問題に直面した。

全体研修の場は、性に対する世代間の違いを見事に映し出した。40代を境にして、それ以上の50代は反対又は慎重派、それ以下の若い教師たちは推進派という図式であった。

「寝た子を起すことはない」

「一部の子どもの問題を全体で取り上げることはない」

「性は教えるものではない。自然とわかってくるものだ」

「性を教えればもっと事態は悪くなる」

このような意見に対して「性教育をなぜ学校で行うのか」という意義から推進派の教師たちは慎重派を十分に説得する力を持ちえない中で、子どもたちの現状を訴えつづけてきた。しかし、実践に踏み出そうという方向に達した背景に、生徒との溝をどうにかして埋めたい、生徒の気持ちを知りたい、その上で問題行動を減らすことにつなげたいという切実な願いが共通にあったからであろう。

しかし、合意の動機はどうあれ、この何度かにわたる全体研修で出された慎重さや否定的な意見に対置した実施の意義や考え方をしっかりとつかむ必要を若い推進派の教師に意識させることになった。

「なぜ性教育を学校で行うのか」という最も大切な意義は、その後も、何年も、くりかえし出されて、社会状況の変化に応じて、その時代に合う意義を語ることが大切であることに気づいた。

それは、生徒たちからも必ず出てくる声であった。特に中学1年の生徒たちからは、最初の授業だけでなく、長く否定的な感情を引きづっているのもみられるのである。

導入期における性への教職員の意識は、生徒の行動や社会の状況からみてかなり立ち遅れていることに気がついたことが共通の認識になっていた。当時の導入の意義を3つあげよう。このころの私たちの認識である。

ア. 女子の性に関する問題行動の多発と行動の質の違いは、現在でも事態は基本的には変わっていないと思われる。女子の行動の変

化の中に、私達の理解を越えるものをはっきりつかむ必要を痛感した。

イ. 学校においても、異性とのかかわりがみられること、それに対してどのように指導していくかという問題が新しく提起され、この問題をめぐって教職員が対立する形になって出て来た。例えば、男子と女子が一緒になって帰ったり、街で二人で話し合っているなどを担任は指導すべきという形であらわれてきたのである。

ウ. 子どもの成長の加速現象から、子ども自身に学ぶ機会を与える意義をのべている。性情報の氾濫などをあげている。

（三笠中学校の性教育～昭和58年度～昭和62年度から一部要約）

2. 「出産」の実践をめぐって

この導入期からの転機になったのは「ヒューマンセクシュアリティ」から学んだからである。結論的にいえば「生殖の性」を中心とした「妊娠」「出産」を軸にした内容を扱うということであった。

問題は「生命誕生」の扱いをめぐってまず起った。「出産」を扱うことは、男性、女性の性器を抜きに語ることはできない。指導のためには、それぞれの名称と機能を正確に扱うことになる。「男女交際」「性情報と私たち」のように直接「下半身」にはふれずに済んだ題材も「出産」を扱うことになったとき避けて済ましてきた部分があらわになったということであった。この頃、性教育は性器教育ばかりで良いのかという批判もあった時でもあった。性器の扱いをどうするかについて話し合ったものである。からだの一部である性器を科学的に正確にとらえることが偏見からの脱皮であると考えた。

この問題は、生徒への実践により、乗り越えることができた。大人の教師の思いを吹き飛ばすかのように、生徒は生まれた喜びとその様子を知った感動を感想文に書いた。それを読んだ授業者らは、勇気づけられたのであった。

この時期にもう一つ意見の相違点があった。それは「出産」は教えても「避妊」は扱ってはならないという考え方が一方ではあったのである。なぜか？。私たちは実践の流れからも「出

産・避妊」というとらえ方をしていただけに、この考え方に対して納得することはできなかった。反対の理由は「避妊」を教えることからさらに性行動へ走る子がふえるという子どもへの不信を示す大人の考えであったと思う。「避妊」のテーマを扱うことを断念した手引書の発行を今はなつかしく思い出す。

3. 「エイズ」の指導をめぐる

エイズの問題は、性教育に対する見方を多様化させた。「エイズ」の指導の必要性が急に声高に叫ばれたとき、あわせて様々な性教育論が登場した。純潔教育の再登場、避妊教育こそが性教育だなどが記憶にある。

「エイズ」を取り上げることは、本校では特別に困難なことではなかった。長年、性教育を実践してきた実績から、エイズを取り入れる土台が子どもと教師の間に共通に出来ていたからである。

このエイズの問題は、これまでの対立の中心になっていた「避妊」の扱いをめぐる論議に世論が結着をつけたと思った。「エイズ」予防には「避妊」は不可欠であるとの受けとめ方になったからである。本校のエイズの導入と「性交と避妊」が93年度に初めて取り上げられているのも、上記のような流れの上にあったと考えられる。

さらに2つの問題を取り上げる。

エイズの扱いをめぐる表面に出てきた1つ目は「性交」をどう性教育の中で扱うかという問題である。これは、大変難しい問題でもあった。その意味からも、性教育の未実施の学校で「エイズ」を取り扱うとき、授業者は「性交」の扱いに直面することになる。「性教育」の第1回目に「性交」を扱うとすればたじろいしてしまうのではないだろうか。

本校においても、どう性教育の中で性交を扱うかという議論が始まっていた。これも学習をつみかさねていたが実践への勇気が出たのは、生徒の一番の関心のある部分であることを私たちも知ったことが大きい。

2つ目は「関係としての性」つまり「異性とのかわり」をどう位置づけるかという問題である。これも性をどうとらえるかという問題を

内包しつつ、性教育の方向を考える視点として重要であるという考えでいた。

4. 7時間扱いへの改訂について

本校の性教育の流れは「純潔教育」から始まって「生殖の性」そして「関係としての性」へと内容を広げながら展開してきた。この流れはセクソロジーノート（村瀬幸浩著）の中で提起されている。

- ① 「宿命の性」から「自己決定の性」へ
- ② 「本能の性」から「文化の性」へ
- ③ 「自身の性」から「関係の性」へ
- ④ 「to do」から「to be」へ

この提起を全体研修において参考文献として学習し合った。(2000年度の性教育学習指導案集) この学習を通じて本校の性教育の方向性をさらに豊かにすることが求められていると考える。そのための研究が今取り組まれていると私は理解している。

5. 対立から学ぶもの

これまでの対立点からいくつかの共通の問題が見えてくる。

ア. 何かの実践に踏み出すとき、対立点をどう考えるかということに1つの方向性があると考えてきた。対立とは単純に排除することであったり否定してしまうということではなく、むしろ自分の不十分さや弱さを点検する上でも傾聴するに値するものであるという印象がこれまでの実践から見えてきたことである。導入期にみられるように正面から激しく対立し合うのではなく、一致できる部分を広げていく道をさぐりながら、互いの主張の中にある共通部分をも見つけてきたこの経験は貴重なものであったと思う。不思議なことに、時代の流れとともに、対立点や相違点が互いの認識の深まりと合わされ、一致できることが次の機会にもあったことである。それは、性教育が教育の原理を示した好例ではないかと私は考えた。

イ. 自分の弱さや不十分さを知る機会となると先にふれたが、私自身の体験でそのことを示すことにする。

私は「出産」の指導に対して、女性のことに對する学習から始めた。この中から、家庭における私の夫としての、又父親としての役割やそのいたらなさを考える機会になった。これに気づいたときの後悔の気持ちを忘れることはできない。私自身のこの体験から、性教育を広くとらえる一生徒の問題としてではなく私自身の問題ともかわらせること—ことの大切さを知ることになった。そして人間を深くとらえるとき性を抜きには考えられないものだという理解に達したとき「性交」への中学生の関心の高さと私自身との共通性から、新しい主題としての「中学生と性交」の授業の改善の方向をつかむことができたと思う。

これらのことに引きずられて、多様な考え方や感じ方があってよいという広さとも、この対立点を広くとらえる中からも出て来たと思う。

ウ. 性教育は、社会の動向と敏感にかかわっている。その時の関心の高い問題とかかわる必要がある。それは、生徒が今はやりの様々な情報をからだ一杯身につけて学校にやって来るからである。時代と生徒のかかわりという視点から性教育に限らない教育へとつながる問題をとらえることができ、それを糸口にしてしっかりと生徒との対話へとつなげて子どもの中心課題をとらえることになるからである。この生徒との信頼関係の日常的な育成が性教育の実践を深めるのである。

エ. 最後に、性に関する対立の意見の中に時代の中で育まれて来た一種の常識と考えられて来た流れとそれからはみ出てきた、あるいはその制約から出ようとする考えがあること、それが衝突するという側面があることを性教育は教えてくれた。

純潔教育の本質は、性の決定権が本人（ここでは女性）にはないということである。それに対置した性教育は「個人」に決定権をもたせようという考えであったことが実践の積み重ねの中から出てきたのである。それが人権という視点から性教育を考えるという立場が確固なものとなり、教育の中

に性教育は位置づけることができた。

現在の研究活動の中心は「生徒の参加」をテーマにしていることは、人権の主体者としての生徒の学習権の行使をどう保障していくかとの観点からの学校の役割への転換へとつながるものとの期待を持つ。

第3章 性教育の実践が培ったもの

1. 学年会の機能とその役割の重要性

本校では全体研修で確認された方針にもとずき、学年会で具体化して実践が行なわれている。従って、学年会での粘り強い討議が大きな役割を果たしている。中でも特に大切なことは、新しく入ってきた教師をどうむかえ入れ、授業に参加してもらうかである。新任の先生方の素朴な疑問や初めて出会う性教育への戸惑いや言い出しにくい気持ちが特に大切にされなければならない。したがって学年会は、新任の先生への学習の場を提供するものとなっているが、決してそれだけにとどまらない重要な意味を持っていることを私たちは経験を通じて知っている。

まず、昨年の指導案の検討から始める。昨年の指導案がそのまま使えるかどうかから話し合いが進められている。

- ・生徒がこれまで性教育を学んできた内容から検討する。
- ・現在の生徒の生活や人間関係から見るとどうなのか。
- ・昨年実践した学年の反省をどう受け取るべきか。
- ・今いる学年所属の教職員の性に対する意識や考えから見てどうなのか、等々

多くの視点から検討する中で話し合いが進められる。それぞれの思いをぶつけるが、素朴な疑問は議論を深めることがある。前から勤務している者にとっては、新任の先生の疑問に答えるという意味での学習と新しい発見の場となる。

また、新任の先生の戸惑いや恥ずかしさは授業を受ける生徒の姿や言動と重なる部分もある。それを授業前に知ることになり、一つの仮説を考えるヒントを提供する場と考えることができる。

このように新旧の先生方の学年会での話し合いが自主的に時間をかけてしっかりと取り組まれてきた伝統が、性教育推進の原動力の一つである。

この学年会は、校内の公務分掌の関係機関とうまくつながって、全体研修や授業参観、日常の交流でさらに多くの教職員との関係をなめらかなものにしていく。

2. 学年会の話し合いの良さ

(1) 生徒の発見の場

複数の目があわされて、テーマに添いながら一人一人の生徒の姿が映し出されてくる。この話し合いの過程で一人の教師の目からは見えてこなかった生徒の姿が共通な姿として立ち現われてきたときの共感の雰囲気は、楽しさに変わる。それがやがて、生徒の顔として目前に出てくると授業をしたいという積極性になってくる。このような体験から、本校では性教育の授業を学年所属教師が分担して行うことに何の異論はない。自然とどの授業をするか決まってくることは、それだけ学年会の話し合いが互いの課題解明に役立っているからである。

(2) 資料を探るとき、広い視野から

生徒の現状やテーマの中心が明らかになることにより、それにふさわしい資料を選ぶ力もつけられたと思う。また、他の学年の人たちもお願いしたり、相談することへと向かっていった。

私たちは、既存の資料にあまり頼ることをしないで、オリジナルな自分たちが納得して使えるものを探す努力をしてきた。当然にないときは、私たちの希望に近いものを一部手直して活用するというのもしてきた。あくまでも、生徒にとってどうか、学年での話し合いの方向にとってどうかということから選んできた。

(3) 指導案を書く力を磨いた

授業をする者は、学年で話し合ったことを指導案という一つの形式に最終的にはまとめる作業が残っている。事前に指導案を準備しようがしまいが、いずれにしても、授業者が指導案をまとめるともう一度、学年会での検討が行われる。一度で終わるとは限らずしっかりと検討する。この中で考えのちがいはあるときは授業者の考えを優先していることが多い。

(4) 授業を参観する

ふだんの授業では研究授業は研修系の計画のもとに全員の参観をしているのはこの学校とも違わない。しかし、性教育の授業は、どういうわけか、学年会に参加した教職員の他に、参観を希望すれば、全校の先生方も見ることができる。参観後の感想や印象を交流するだけでなく、入った教室の生徒たちと授業後交流がつけられ、それがまた、学年会の反省の中で語られ生かされる。

(5) 協力・共同の実践

学年所属の教師の分担により、性教育の授業を行うことは、教職員集団の協力共同の生きた実践であり、学年会は、そのための方針をたて計画をねり、実行し反省をまとめるという機能を持っているが、これらの一連の一つ一つをやりこなしていくことにより、学年内の人とのつながりが滑らかに、わだかまりもなく素直な関係となっていく。そういう雰囲気をつくり上げることがまた性教育の研究をつづけてきた力となったと思う。

3. 学年会の機能の広がり

学年会がうまく機能していくと、自然とその学年会から全校へと視野を広げた提起が出てくる。つまり、協力・共同のシステムが他の活動や領域に広がっていくということである。中学校では、学年内で処理する事もあるが、多くは他の学年や全校とつながっているものである。だから、学年会の機能が十分に機能していると自然とその良さが他へ影響を与えることになるのである。この良さが生徒指導の面で発揮されている。一人の生徒に対して、学年会の所属の教師の関連はもちろんのこと、この学年から全校又は他の学年にどうかかわるかの要請が出される。このことが気軽に出来る条件をつくり出した。その一つの結果として、毎朝の会において「生徒に関する情報交換の場」が設けられるようになり、朝のうちに各学年は対応を考えながら一日の生活が始まるのである。

4. 授業改善の突破口としての性教育の授業

性教育を始める際に共通に見られる教師のためらいや、恥ずかしさは、誰もが責められるも

のではない。まさにこの恥ずかしさやりたくないという思いに合う授業から始まったのである。今では、本校ではあたりまえになっている生徒の授業後の感想文やアンケートをとって授業の資料として使うというの、もとをただせば「性にかかわることものに触れたくない、言わないでおきたい」という授業者の心情の一つの方策であった。このことが続けられることによって、授業改善、性教育への関心を高めたという皮肉なことになろうとは、不思議な思いである。

さきに触れた「生徒の感想文」や「アンケート」を取ってということと別な表現では「生徒の声」を聞くという姿勢が生まれてきたともいえる。

私たちが性教育を生徒指導の一環としてとらえてきた根底に生徒理解を深めたいという要求があったのである。だから、性教育の授業においてもこだわったのは、授業中の生徒の反応であり授業後の感想文であった。生徒とのかかわりを重視してきたので、生徒たちとのかかわりや関係づくり、他の授業の面への広がりを実際に把握し、それがまた性教育の実践へのバネにするという流れとなっていた。だから性教育の授業をどうつくってきたかという問いは、性教育の授業でどうやって生徒の声を聞いてきたかという問い返えとして理解しているところである。「生徒の声を聞く」という地下水脈の上に性教育の授業の変遷があるともいえるのである。

(1) 「非行の増大」を「性教育の実践へ」

くり返しになるが、性教育への第一歩を踏み出した勇気の背後に「生徒の生の姿」をもっと知りたい。そのための「対話の場」をつくるという「生徒の声を聞く。」性教育であったといえる。

(2) 「感想文」を読む…「生徒の声を聞く」一歩

「感想文」を最初から授業に位置づけたきっかけは先に書いた。以来19年の長期にわたって途切れることなく、この活動は根付いている。感想文が励みになって、私たちは授業のための性教育の研究へと向かわせていく。さらに資料として学年便りにのせることにより、生徒同士先生と生徒、親とのかかわりとその影響が広

がっていった。現在、研究テーマとなっている「生徒の感想文を授業改善に生かす」につながっている。

(3) 生徒の活動を取り入れた授業へ

これまでの長い歩みから授業は着実に生徒の参加を広げてきたと読みとれる。

概括的に列挙してみる。①～⑤へと進んでいる

- ① ビデオ (市販) 20分+感想文 (以下同じなので省く)
- ② 本のコピーの読み合わせ
- ③ 教師自作の「学習資料」の活用
 - ・OHPの活用
 - ・立体模型の作成
 - ・掲示物の作成
 - ・ビデオの編集しなおして活用 など
- ④ 子どもの参加を工夫した授業
 - ・班活動の活用…自立尺度表の作成、ジェンダーチェックの作成
 - ・ロールプレアの導入…「生徒がシナリオを読む」→「ビデオ」にとって授業に活用」→「シナリオを作って」「ビデオに」
 - ・実物を活用した授業…コンドームの扱い方、避妊のいろいろ
 - ・「アンケート」を資料とした授業
- ⑤ 「感想文」を生かした授業改善

今年度(01年度)の研究紀要にくわしいが、生徒が書いてくれた感想文の活用方法を考えたが、その一つとして実際に行った授業と感想文の対比から、本時の授業が生徒にとって効果的であったのか一目標の是非をふくめて一を検証しようというものである。

5. 教師を鍛える場

(1) 生徒とのコミュニケーションをより広く、より深く

性教育の実践してますますはっきりわかったことがある。それは、教育の毎日の活動と性教育の共通性とその関連である。

男女が自由で平等な関係を互いにつくり出していくところに関係としての性の中心がある。この自由と平等の人権感覚こそが、基底にしっかりと根付いていることが絶対不可欠ということである。書いてしまえば簡単に見えるが、私

にとってようやくはっきりとその重要性を認識することができた。

このことは、毎日の生活において安心して生活を送れること、人と人との関係が人間として尊重され、楽しい毎日が送れることを前提としている。だが、現実の教育界は、不登校、いじめ、学級崩壊、校内暴力、虐待、自殺など人間としての存立もあやうい問題をかかえている。これらの問題とつながるテレクラや援交、買売春などなどもある。

こんな多くの問題と性教育はどういう関係にあるかという問題を私たちに突きつけている。

これらの問題を一気に解決することはできないけれども、放置することもできない。そんな中で、これらの問題と同様に性の問題を中心にすえて、話し合いを深めることではないかということに気づいた。教師が生徒に教えるという制度上の関係をこえて、ともに学び合い教え合う関係としての人間としての共通な意識の上に立った平等の土俵の上で語り合う授業が今求められていると私は考えるのである。

それが生徒とのコミュニケーションをより広く深くということを教師の今の磨くべき資質の1つとして必要であると考えた。

「生徒の声を聞く」「生徒の内面の鼓動を聞く」から一歩出て、生徒とともに今生きている人間として考え合う教師の一人として自己変革を必要としていると私は考える。

(2) 教師の「個性」を磨く

性教育の授業を実践して、どうしても心を開かない生徒が必ずといってよいほど出てくる。そんな生徒は、ふだんにおいても、私との関係が遠いことに気づいた。私はこのような生徒との関係改善を考えることになった。つまり、自分にとって一番苦手な生徒とのコミュニケーションをとる道への探求であった。

自分と相性の良いと思われる生徒はすぐ近くに来るからどうしても多く声をかけてやることになる。それは、それとして良いわけがないことに気づいたのである。これでは、私自身の世界が少しも広がらないことに気づいたのである。近くに来る生徒とのコミュニケーションをとるときは、私は手持ちの財産のいくつかを持って対応すればよいから、私という資源は少

しも豊かにならないということになるからである。従って自己反省も自己改革の必要はここからは出ない。それに対して、苦手と思われる子、私より遠くにいる子は、私の手持ちの駒では勝負はできない。そこで、いろいろ知恵を働かせて、苦手な生徒について調べたり友達との会話から学んだりして、もっと近づく道を探求することにした。そこで彼の姿の中に、私にはない新しいものが見えたとき、私はその魅力に引かれて、そして自分が最も自信を持っているものを引っさげて交流の場を求める。こここのところで、生徒の新しい発見をバネに教師としての自分が磨かれて輝く部分としての個性の問題があると考えた。その意味で、異なるところを発見ととらえる発想の転換こそが苦手な生徒とのコミュニケーションの方法であった。彼の得意とするものを学ぶとき、彼のもっている優れて新しい部分を吸収して充たされた気分と同時に大切な近い人へと変っていったのである。

性教育がこのような視点を与えるきっかけになったことは、私にとってとても幸せなことであった。

性教育とはまさに教育の原理を解き明かしたと思った。それは、教えたり学んだりという共通の場において、互いの人間としての奥深い魅力の発見の場でありその交流の場が性教育であるという理解を私は今考える。この考えでいくと、まさに対話することの楽しさ、深さを知ることが性教育の授業の核に座ることになる。その意味からも、本校の性教育が生徒の参加へと研究が進んでいることは、生徒たちとの対話へとつながっている。性教育は教育になっているという思いはさらに強くなった。

おわりに

最後に三笠中学校の性教育実践の到達点と今後の課題にふれて、まとめにしたい。

1. 性教育実践の到達点について

(1) 性教育と学校の教育活動との関連と役割を明らかにした

性教育がめざすのは「性のすばらしさ」「性を肯定的に受け入れる」ことである。思春期に

ある子どもが初めて出会う性を本当にすばらしいものと知ることは出来るのだろうか又、性教育の実践は子どもへの「性のすすめ」ではないかという批判がこれまで幾度となく出てきた。

これらの批判は、性と生の一致、統一的にとらえることにより、中学生を対象とした性教育実践の根拠と学校教育での位置づけが明らかになった。

「性行動」の本質を「孤独・淋しさ」から「共にいる安心」「楽しさ」そして「生きる力」へとつながるものととらえたとき、それは「性」だけのものではなく、人間が生きている現実そのものであることに気づいた。人と人との交わりの中から生まれる「快」の気分や雰囲気は、この中にこそ人間存在の貴重な意義がある。その結果として「人間のすばらしさ」となる。従って「性」と出会う思春期に出てくる「性」の「快」や「安心」を特別に見るのではなく、毎日の生活の中ですでにこれらの良質な体験こそが性を準備するものであり、性を深めることと理解できた。

この理解は、さらに2つの問題を明らかにすることができた。

1つは、人間としてのすばらしさを日々体験できる学校をつくること、従って毎日の教育活動が「楽しさと意欲に満ちた」生徒たちの手によって推進されること、生徒間の問題も生徒たちの力によって解決できるというものを目指すことの大切さに気づいたことである。2つ目は、人間としての見方を大事にすることは、子どもの成長過程をしっかりと学ぶことが求められることと、子ども一人一人の直面している課題（悩み・葛藤など）をとらえることの再認識であった。性教育の内容は、子どもの思春期の発達の過程から導かれるという理解から、性教育が学校教育の中にその位置をすえることができた。さらに「生徒の声を聞く」ことのこれまでの実績の積み上げがいつそうの確信となったのである。

(2) 性教育の授業の変化から

参加型の授業という提起は、ここ数年毎年の反省の中から出され、実践の面からも評価できる新しい研究であると指摘できる。

性教育の1単位時間の内容をどうやって埋め

ていくかという手さぐりの初期の頃から、現在の授業は、性教育の授業を1単位時間の本時とその準備とその後のまとめや学習資料の作成などへと幅広くとらえるようになってきている。このような生徒とともに活動する場面が広く用意されている授業実践が見られること、ここに現在の授業実践の姿があり、到達点ということができる。

さらに、性教育の授業の中心に生徒たちの活動をすえることは、教師—生徒という関係を変えることになる。教師と生徒とは、内実は、ともに考え、話し合い、学び合うという関係へとしいだいに向かっていかざるを得ないと考えることができる。「学び」の場としての授業への転換が全教職の共通の意識となることになると信じる。（2点だけにする）

2. 今後の課題

(1) 子どもの姿のとらえ直し

最近の子どもの様子について話題になることはつきない。これまでの実践から「生の声」を把握することができるようになってきているとの印象がある。「アンケート」の内容からそのことを感じる。授業者が信頼されている証明である。それらの良さを教職員、父母との共通な場で深めることにもっともっと時間と場を考えると。そのとき「生徒の声」を聞きとる教師としての専門性はきわだって求められる技倆であろう。

(2) 授業改善をさらに

生徒たちがつくる授業というにふさわしいテーマ設定そのものがもはや生徒のものにすることを準備する時が来ることを予想した教師の活動や研修の進め方の研究ということになろう。

(3) 従って、性教育の理論を全体のものにする必要がでてくる。

以上のような課題を実践上の問題としていく研究の焦点化と推進体制についても、一考を要すると考える。

参 考 文 献

- ・三笠中学校「研究紀要」(平成元年3月、平成2年3月、平成4年3月、平成8年3月、平成9年3月)
- ・三笠中学校「性教育学習指導案」(平成3年度の実践、平成5年度、1994年度、1995年度、1996年度、1997年度—以上B4版で作成、1998年度、1999年度、2000年度—A4版で作成)資料
- ・三笠中学校の性教育の諸相
2001年3月11日作成
- ・三笠中学校の性教育の歩み
1998年6月17日作成
2002年1月16日作成

最後に、このような機会を与えて下さった北海道教育大学岩見沢校の関係者の皆様方とご指導いただいた同校の前田賢次氏に感謝の気持ちをお伝えします。

(生徒指導論)

三笠中学校の性教育の歩み

資料 I
1998年 6 月 17 日作成

| 年数 | 年度 | 学年毎の主題一覧 | | | 配当時間 | 授業形態など | 性教育の中心テーマ・考え方など | 研究推進など |
|----|-------------------|---------------------------------------|---|---|--------------------------|---|---------------------------------------|---|
| | | 1 年 | 2 年 | 3 年 | | | | |
| 1 | 1984年 3 月 (S58) | | | 全体指導 (3 学期) | 3 年生 1 時間 | 講話 (養護教諭) | 性非行防止 (純潔教育) | |
| 2 | 1984年度 (S59) | 男子のからだ 女子のからだ | 思春期の心 | 異性との交際とエチケット | ・各学年 1 時間 | 担任の講義中心 | | 生徒指導委員会で扱う |
| 3 | 1985年度 (S60) | 男女交際 (異性とのかわりビデオ 20 分) | 身体と心の成長 (思春期の心ビデオ20分) | 結婚と健康 (性と健康ビデオ20分) | | ・ビデオ視聴 20分 ・授業者の解説 ・感想文 15分 | | |
| 4 | 1986年度 (S61) | 同上 | 同上 | 男女の性心理・衝動を学ぶ | | | | |
| 5 | 1987年度 (S62) | (1)自分たちの性意識を知る (2)異性との関わりを学ぶ | (1)大人への第一歩 (2)男女交際 | (1)性に対する関心度をつかむ (2)性を正しく知るために | ・各学年 3 時間 (授業 2、アンケート 1) | ・2 年生が新しい指導案で取り組む | | |
| 6 | 1988年度 (S63) | (1)大人への第一歩 (2)男子の体・女子の体 (3)生命誕生 | (1)性情報への対応 (2)男女の性意識と行動 (3)明るい男女交際 | (1)性情報と私たち (2)生命誕生 | ・各学年 3 時間の扱いとする | | human Sexuality の立場から性をとらえ、性教育を組み立てる。 | ・公開研にに取り組む カリキュラム編成など性教育全体を見直す |
| 7 | 1989年度 (S64) (H1) | 同上 | 同上 | (1)愛と性の関わり (2)自立・共生・結婚・家族 (3)生命誕生 | | ・主題や内容に応じて自主教材をつくる ・生徒の参加を考えた授業 (班の話し合い、アンケート) | | 「性教育の手引き」発行 (三笠市教育研究所) |
| 8 | 1990年度 (H2) | 同上 | 同上 | (1)愛と性 (2 時間) (2)自立・共生 | | ・必ず感想文を ・「学年便り」等で父母に知らせる | | 学年・学級を中核とした生徒指導の充実をめざして「～7 年目の性教育をふりかえる～」 |
| 9 | 1991年度 (H3) | 同上 | 同上 | (1)男女の性意識と行動 (3)愛と性①、② (3)自立と共生 | ・3 学年が 4 時間となる。 | | | 「性教育の今日的課題の解明を求めて」～道外視察報告から～ |
| 10 | 1992年度 (H4) | (1)大人への第一歩 (2)男子のからだ (3)女子のからだ | (1)性情報と私たち (2)私たちの性意識と行動 (3)男女のすてきな交際 | (1)愛と性①、② (2)生命誕生 (3)自立と共生 | | | | 文部省指導要領改訂 (保健理科、小 5 に性に関する指導) |
| 11 | 1993年度 (H5) | 同上 | (1)性情報と私たち (2)エイズについて考えよう (3)すてきな男女交際 | (1)新生命誕生 (2)性交と避妊①、② (3)自立と共生 | | | ・エイズを取り入れる ・性交と避妊を扱う | |
| 12 | 1994年度 (H6) | (1)第 2 の誕生 (2)思春期の Q & A (3)エイズ | 同上 | (1)生命誕生 (2)性交と避妊 (3)自立と共生 | | | | |
| 13 | 1995年度 (H7) | 同上 | (1)性情報と私たち (2)すてきな男女交際①、② (3)中学生と性交 (4)エイズ | (1)生命誕生 VTR (2)性交と避妊 (3)エイズ・STD (4)男女の共生 | | | ・各学年でエイズを扱う | 「豊かなセクシュアリティを培う性教育の実践」～12 年間の歩みとこれからの性教育 |

| 年数 | 年度 | 学年毎の主題一覧 | | | 配当時間 | 授業形態など | 性教育の中心テーマ・考え方など | 研究推進など |
|----|--------------|--|---|---|-------------------------|---|--|--|
| | | 1年 | 2年 | 3年 | | | | |
| 14 | 1996年度 (H8) | (1)第二の誕生 (2)男子のからだ (3)女子のからだ (4)思春期のQ&A | (1)性情報と私たち (2)中学生と性交 (3)すてきな男女交際 (4)自立と共生 (導入編) | 同上 | | | ・空知管内教育実践表彰 (空知教育局) | 「三笠中学校の性教育とエイズに関する指導について」 |
| 15 | 1997年度 (H9) | 同上 | (1)性情報と私たち (2)中学生と性交 (3)すてきな男女交際 | 同上 | | | | 「性教育覚え書1～4」 |
| 16 | 1998年度 (H10) | (1)性教育ってなに (2)男子の体 (3)女子の体 (4)思春期Q&A | (1)性情報と私たち (2)中学生と性交 (3)すてきな男女交際 | (1)生命誕生 (2)性交と避妊 (3)エイズと私たち (4)男女の共生 障害児学級の性教育 (1)男子のからだ (2)女子のからだ | 1年と3年 4時間 | ・班活動を取り入れた授業など | | 研究紀要作成 ・A4版で発行 |
| 17 | 1999年度 (H11) | (1)思春期の心と体の変化 (2)男子の体 (3)女子の体 | (1)性情報と私たち (2)性交と人間関係 (3)性交と中学生 (4)すてきな男女交際 | (1)生命誕生 (2)性交と避妊 (3)エイズと私たち (4)自立と共生 障害児学級の性教育 (1)アンケート実施 (2)男子の体 | | | 「誰もが取り組める性教育の授業研究」～自己決定の場面を取り入れた参加型の授業を目指して～ | 研究紀要の作成 (性教育学習指導案) |
| 18 | 2000年度 (H12) | (1)、(2)からだとの対話 (3)性の疑問 (4)思春期の心とからだ (5)男のからだ (6)女のからだ (7)まとめと反省 | (1)性情報とわたしたち① ～私たちを取り巻く情報～ (2)同上② ～望ましい性情報の取り入れ方～ (3)性交と人間関係 ～性交の多様性とその本質～ (4)性交と中学生① ～中学生に性交が与える影響～ (5)性交と中学生② ～中学生としての男女の結びつき～ (6)すてきな男女交際① ～中学生の男女交際～ (7)同上② ～望ましい男女交際のあり方～ | (1)生命誕生 (2)性交と避妊① ～避妊の歴史～ (3)性交と避妊② ～避妊の方法と種類～ (4)避妊と性交③ ～よく知ろう人工妊娠中絶～ (5)STDって知ってる？ (6)自立と共生① ～自立について考える～ (7)自立と共生② ～ジェンダーチェックを作ろう～ | 全学年 7時間扱いで テーマ設定。 | ・ロールプレーをビデオにして授業で扱う (2年) | 誰もが取り組める性教育の授業研究 ～参加型の授業を目指して～ ・本校の実践の流れを概観 純潔教育 ↓ 生殖の性 ↓ 関係としての性 | 同上 |
| 19 | 2001年度 (H13) | (1)性教育ってなあに (2)エロイ言葉 (3)男のからだ (4)女のからだ (5)思春期の心 (6)エイズ① ～エイズのしくみ～ (7)生命誕生のしくみ | (1)男女交際 (2)性情報と私たち (3)性交の多様性 (4)性交の影響① (5)性交の影響② (6)エイズ② ～社会とのかかわり～ (7)男女交際 | (1)生命誕生 (2)性交と避妊① ～避妊の歴史～ (3)同上② ～避妊の方法～ (4)同上③ ～人工妊娠中絶～ (5)エイズ③ ～性感染症とのかかわり～ (6)STD (性感染症) (7)自立と共生 | | ・ロールプレーをビデオにして授業 (2年、3年) ・授業前と後に生徒と活動する場をつくる | ・「生徒の感想文から授業改善の視点をさぐる」 | 三笠市教育研究協議会より研究指定を受ける。(2年間) ・1年次前年度の各学年のテーマを仮説として実践検証を行なう 10月26日 ・中間発表 ・公開授業を行う |
| 20 | 2002年度 (H14) | | | | | | | 上記の本発表 |

2002年1月16日 一部追加作成

三笠中学校の性教育の諸相

| ☆非行の第3のピーク：1975年の非行の特徴と80年代の非行の特徴→三笠中学校の非行と性教育 | | A | B | C | D | E | F | G |
|--|------------|----|--|---|--|--|--|---|
| 年 | 年度 | 段階 | 段階の特徴 | 校内の動き | 研究活動に関して | 授業実践など | 性教育に対する考え | 対立点など |
| 1 | 83 84.3 | 導入 | 各学年1時間1テーマから3時間2～3テーマへ 性教育にとって大切なこと ・生徒との信頼関係 ・性教育の基本がわかったこと ・性教育の足かりをつくったこと ・各学年3時間、3テーマを ・生徒理解が深まる | 84年度 補導委員会→ 生徒指導委員会 生活係と養護教諭で原案をつくり、指導委員会で検討して全体研修を行う。 | 84年度 全道性教育大会に2名参加 アンケータート実施 アンケータート実施 | ① 簡単な指導案（例えば） ② 導入 10分 ③ ビデオ視聴 20分 ④ 話し合い 10分 ⑤ 感想（教師の講義ビデオ視聴中心） | 非行対策から性教育 ・純粋教育からの脱却 ・性非行の予防と被害者にならない。 | 性教育の是非 ・寝た子を起すな ・性非行をなくす ・「快楽」の性をめぐって 性非行 |
| 6 | 88 S.63 | 改善 | (1) 3年かけて各学年3時間、3テーマをつくる。 (2) 全体像を明らかにするため土台となる研究をする。 ・性とは、性の基本的内容、性教育とは この期の成果 ・研究意欲が高まる ・授業の充実 ・教育過程への位置づけ | 88年度 自主的に研究に取り組み、 89年度 毎年公開研究協賛 90年度 三笠市教育研究協賛 91年度 三笠市教育研究協賛 92年度 三笠市教育研究協賛 | 88年度 公開研究に取り組み 全体を早直す (5年間の総括をする) 90年度 学年・学級を中核とし 生徒指導の充実をめ ざして～7年の歩み 91年度 「性教育の今日的課題」 「全国大会」神戸へ行 く(2人) | 授業の形になった ・資料が準備できた ・生徒の活動を考えた授業 (班活動) ・学年間の話し合いが深まる。 | ヒューマンセクシュアリティを 軸に内容を組み立てる ・妊娠、出産につながる月経、 射精など… | 「生命の誕生」・出産は教 えても「避妊」は教えない。 「避妊」を教えると「性」 は行さずさる 「生殖の性」中心 |
| 11 | 93 H.5 | 充実 | (1) エイズを主題に各学年に取り入れ、3年かけて実践すること (2) 「性交」を主題に加えること ・重点にすわられる。 (3) 対外的な交流が始まる。 | 95年度 三笠市教育研究所の所 員となった本校の研修 係が「性交」を中心と する公開授業を行う。 96年度 滝川高新聞部をうける。 97年度 北見市立上常呂中來校 して交流 98年度 公開研上記の再訪 | 95年度 「豊かなセクシュアリア ティを築く性教育の実 践」12年間の歩み～ 「エイズに関する指導」 発表 96年度 「性教育の覚え書」 97年度 「性教育が培ってきた もの」 | 年間計画にもとずき研究実践 がきちんと行なわれ、反省と ともに実践集ができた。 ・担任外も授業 ・対外との交流がでてきた。 | エイズをテーマに加えたことに 見直し「性交」を軸に主題の一部 性の研究がより広く進む。… セクシュアリティなど エロス | 「性交」を教えることは認 めない。 「エイズ」の指導では「性 交」は避けられない。「関係」と しての性を加えていく。 ヒルの扱い |
| 18 | 00 H.12 | 発展 | ・主題を従前と同じく、授業時数を4時間から7時間にす。 ・生徒の参加を中心にすえた授業と性教育の内容を研究する | 00年度 性教育の授業に教育大 生自主的に参加する ・指定研究を深めるための校内 体制をつくり全校で取り組 む。 | 00年度 「生徒の感想文から性 教育の改善の視点をさぐる」 01年度 三教研指定 中間発表 02年度 三教研指定 本発表 | 学年を中心に増えた時数 に見合う内容をつくった。 前年度の実践の反省を生かし た検証 | ・年度反省により、カリキュラ ムの検討課題が示された。 ・学年ごとの実践を全体に関係 づける ・新教育課程にどう結びつける か | ・性的虐待、セクシュアル ハラースメント、ビルなど ・「授業」をどうつくるか |
| 20 | 02 H.14 | 期 | | | | | | |
| | | H. | 性教育の実践を支えたもの (1) 学校の組織とかみ合った推進…子どもを中心にして ・学年の力量を発揮 授業の確保、体制、研究推進 | (2) 研究の公開性・授業の交流・記録 | I. 今後の課題 (1) 子どもにとらえなおし (2) 授業の改善…子どもたちの活動を中心に (3) 性教育の理論の再構築 (4) 研究・研修の焦点化 など | | | |